



# スリランカ訪問記

善光寺海外留学僧派遣育英会  
常任理事

佐藤俊明



コロンボまで

十月二十六日、月曜日、快晴・無風・適温、まさに「いい日旅立ち」である。

途中クルマの渋滞もなく、予定より早く成田空港に着く。集合時刻まで間があるので、「ツアー確認書」を取出して見ると、まず、ツアー・ネーム「黒田パーティ・スリランカ・ツアー」とある。

善光寺海外留学僧派遣育英会ではこれまでス

リランカに二名の留学僧を送ったが、今回、愛知学院大学院に在学中のスリランカ比丘を留学僧に採用することになった。この機会にスリランカとの親善友好を深める途を模索しようではないかと、黒田理事長と常務理事の私の前々からのコンビに、今回は顧問の伊藤喜三郎先生が加わって三人がツアーを組んだ。それが黒田パーティである。

ツアー確認書にひととおり目を通し終って、  
「もうそろそろ到着されたかも知れん」と席を

立ってエアランカ航空の受付近くに足を運ぶと、黒田理事長と伊藤先生夫婦の姿が見えた。挨拶を交わして、

「伊藤先生、奥様も一緒にですか」と問うと、「いや、ぼくが『ちよつと淋しいねえ』といったら、『しょうがないわねえ。では送ってあげよう』と、急にここまで出て来たんですよ」と。

「なるほど！ 燃えてるわけだ」と思ったのは、いま読売新聞朝刊に津本陽の「万次郎の生涯 椿と花水木」が連載されており、その挿絵、「伊藤三喜庵」とあるが、三喜庵とは実はほかならぬこの伊藤喜三郎先生なのである。毎日夕方に作家の原稿が届き、夜十時過ぎから絵を描きはじめ、翌朝バイクの集配に渡すという生活がすでに五カ月も続いている。八日間も海外に出るとなると、おおむねの筋書は承知しても、前以って描いておくんではその日その日の文章にぴったり合った絵となるかどうかは保証の限

りではない。

「十六、七枚描いておきましたよ。力を入れて描いて来たから大丈夫ですよ」と。

これが日本人の平均寿命を二つクリアした人の話である。燃えてなくては出来る仕事ではない。

三人そろったので早速荷物積み込み手続きにはいる。飛行機はコロンボ直行、エアランカ四五五便、十三時五分発。この飛行機は日曜日の夜コロンボを飛び発って月曜日の十一時五分成田に着き、二時間翼を休めてまたコロンボに向かうので、私たちの帰国は次の月曜日十一月二日となる。

たった二時間だけの休憩では準備も整わなかったのか、離陸は一時間近くも遅れたようだった。

上空に達して間もなく飲み物に続いて食事が出た。「アジア系の航空会社の中では機内サービ

スもい」と案内書に書いてあるとおり、機内食はなかなかいい。食事終つて時計を見ると午後三時三十分。日本、スリランカは時差三時間三十分なので、スリランカ時間でいうとちょうど正午。正午といえば私たち空港ラウンジでコーヒーを飲みながら搭乗開始を待っていた時刻なので振り出しに戻った感じがしなくもない。いまはいったい何処にいるのだろう。恐らく台湾上空あたりか。行けば行くほど遅くなる。なんだかタイム・スリップを味わう旅になりそうな気になる。

食事が済むと、アルコールがまわってきたせいか機内は途端ににぎやかになった。座席で隣同士話し合うもの、座席を立って話し合うもの、まさに「ふれあい広場」といった風だった。こうした雰囲気の中で、パナガラ・ウパティッサ師と会えたのはまことに有難い仏縁だった。この人は駐日スリランカ比丘の代表であり、イン

ド大菩提会の日本支部事務総長だった。

黒田理事長は育英会の資料を手交し、スリランカ訪問の目的を熱っぽく説明した。師も深く感じ入った様子で、滞在中の日程の消化に全面的に協力する旨約してくれた。

遅れて離陸したのであったが予定より少々早く七時十分(日本時間十時四十分)、スリランカの空の玄関カトウナーヤカ空港に着いた。

空港には遠藤先生ご夫妻が出迎えてくれた。

遠藤先生はコロンボ在住十六年、「仏教のスリラン化」を中心テーマとして研究に精進され、ケラニヤ大学で仏教学大学院講師としてパーリ学を担当しておられる新進気鋭の学者である。奥さんはスリランカの方で、第二回留学僧中野良教師はこの遠藤夫人にパーリ語と英語を学んだという。

空港からコロンボまでは三十二キロ、迎える車に乗ってホテルに着いたのが九時過ぎ、日本

時間ではえば午前〇時を過ぎているので、さすがに瞼が重くなる。

### 遺跡巡拝

スリランカというところ、シンハラ族とタミル族との争いが一時はげしかったことを思い出す。シンハラ族は国民の約七割でおおむね仏教徒であり、タミル族は二割弱でその多くはヒンドゥ教徒である。

紀元前五百年頃、アヌラーダプラ一带はヴィジャヤが統治していた。彼はシンハラ族の先祖といわれている。

仏教は紀元前二四七年六月の満月の日、インドの仏教王アショーカ（阿育王）の息子マヒンダによってこの王朝にもたらされたと伝えられている。また、アシヨーカ王の王女マヒンダの妹サンガミッタが、インド・ブツダガヤの菩提樹（その木の下で釈尊が悟りを開いた）の分け

枝をもつて来たのもその頃で、その菩提樹はブツダガヤの菩提樹と同じようにいまも青々と茂っている。

仏教はこの国の全域にひろまって今日に及び、タイ・ミャンマー（ビルマ）など東南アジアの各地に伝播するまでに成長を遂げ、シンハラ人の間で精神的支柱として定着し、仏教はほぼ国教化している。

それだけにこの国の人々は古い仏教遺跡の現在することを無上の誇りとし、これが保護に力を注いでいる。

仏教遺跡は全島いたる処にあるが、中でもスリランカの最中央部、アヌラーダプラ、ポロンナルワ、キャンデイの三都市を結んだ三角形の内側は、世界有数の大遺跡群が現存する地であり、「文化三角地帯（カルチュラル・トライアングル）」の名をもつて広く知られている。

ここにある遺跡の多くは、その規模、歴史的

及び美術的価値において非常に重要なものであり、さらに注目すべきは、これらの遺跡が、単に參觀だけではなく現在でも敬虔な礼拝の対象となつてゐることである。

遺跡は紀元前三世紀頃から続いた歴代の王朝が造りあげてきたものでそれぞれ特色があり、アヌラーダプラのように、はじめ北にあつた都が、インドからの侵略者によつて逐次南下を余儀なくされ、次々と遷都を続けたその跡を刻んだものでもある。そしてそこにはいろんな伝説が語りつがれ、興味津々たるものがある。

その物語の一例を示したものが文末に掲げる「シーギリヤレデイの誘い」である。

遺跡巡拝は北へ行つて南下しよう、というところでホテルを出た車はまず途中ケラニヤ大学に立寄つた。この大学には前述の遠藤先生ご夫妻が奉職しており、また第二期留学僧の中野良教師はここで五年間学ばれたし、さらに育英会講

師森祖道先生が一昨年七月から九月までパーリ学仏教大学院に客員教授として招かれており、縁の深い大学だからである。

ちょうど登校時で、学生が三三五五校門をくぐつていたので、いっしょにカメラに納まつてもらつたりしたが、実に素直ないい青年たちだつたことが特に印象深かつた。

彼らと別れて車は一路北上し、十時過ぎ、巨象が水を浴びている池のほとりのレストラんで休憩をとつた。

いま、池と書いたが、スリランカに来てまず気付いたことは池が多いことだつた。これは、古来歴代の王朝が大規模な灌漑用貯水池を造り、水路を整備し、農業の振興につとめて来た跡である。

シーギリヤのカツシャバが父王の王座を奪い取り、「隠してある財産を全部出せ」と迫つたとき、父ダッセナは無言でカラヴェヴァ貯水池に



カッシャバを連れて行き、貯水池を指さし、「これが私の財産のすべてだ」といって息子に殺されてしまうのだが、この一言によってでも、彼らがいかに灌漑に力を注いでいたかがわかる。そして今日も多分にその恩恵に浴しているのである。

さわやかな木蔭で巨象の水浴を眺めながらお茶を一服してまた北上を続け、午後一時過ぎシーギリヤ・ビレッヂに着く。昼食をとって休憩。暑さを避けて四時過ぎシーギリヤ・ロックに登り、七時少々前に帰る。(文末の物語を参照されたい)

夕食の時、四人の楽士がそれぞれ楽器をかきならし、歌をうたって各テーブルを流してまわった。興にのつた三喜庵先生、ナプキン・ペーパーにスケッチをはじめた。黒田理事長また得意の美声で楽士に和したため、ホール中の注目を集め、「愉快な日本人トリオ」になった。

翌朝、スラリンカ最古の都アヌラーダプラに向かう。かつての繁栄を象徴するかのように町のあちこちに点在するダゴバ（パゴダ）は天にそびえ、数々の彫像はみな柔和なほほえみをたたえている。

次に、阿育王の王子マヒンダがアヌラーダ王に仏法を伝えたという土地、王子の名に因んで名付けられたミヒンタレーはぜひ巡拝したいところだったが、時間の都合上割愛せざるを得ず、釈尊の髪を祀っているという。山の上のダゴバ、マハ・セナ大塔を遠く望み見てポロンナルワに向かった。

ポロンナルワは十世紀から十二世紀にかけてシンハラ王朝のあった都で、その全盛期には、タイやビルマからも僧侶が訪れるほどの仏教都市だったという。客殿跡もあれば閣議場の柱のレリーフ、裁判所跡なども残っている。

ここで有名なのはガル・ヴィハーラ（寺）に



ある仏陀釈尊の坐像・立像・涅槃像である。特に涅槃像は、「應に度すべき所の者は皆已に度し訖つて、沙羅双樹の間に於いて、將に涅槃に入りたまわんとす。この時中夜寂然として声無し」と遺教經に述べられてあるとおりの穏やかな表情で実に素晴らしい。

さて、涅槃像のわきの立像は、従来阿難尊者とされてきた。両手を胸に合わせているので、お釈迦さまの涅槃に接し、じつと悲しみをこらえている姿に見えなくもないし、そのように説明されてきた。しかし最近これは阿難像ではなく釈尊像だという反論がある。私もそのように拝観した。その理由は、両手を胸に合わせているのは經行の際の捐手（叉手）の変型であり、眼は四十五度の角度で大地に視線をおとしており、足は左足が半跌倒に出ており、而も仏さま以外に乗ることのない蓮台に立っておられるからである。



涅槃像の前を立ち去り難い思いであとにしたのは日も暮れかかってからだだった。車は既舎に向かう悍馬のように疾駆したが宵闇迫り、真暗闇の中を走ること二時間、八時過ぎシーギリヤ・ビレッヂに着いた。ホテルの支配人やコック長など遅く帰って来た「愉快な日本人トリオ」を心から歓待してくれた。

仏跡巡拝第三日目。ダンプラの石窟寺院に向かう。ここにはスリランカ最大の石窟寺院がある。それは高さ約八十メートルある岩山の頂上近くの石窟寺院で、洞窟は五窟に分かれ、百体以上の彫像や塑像がならび、天井および壁画にはくまなく壁画が描かれてある。

修行者が悟りを開こうと瞑想を重ねていた自然の洞窟に、紀元前一世紀の頃から壁画が描かれ、仏像が彫られ、今世紀のはじめまで二千年にわたって掘り続けられてきたというもので、すべては仏陀釈尊像であり、スリランカの人び

との釈尊に対する信仰敬慕の念の強さがうかがわれる。

午後キャンデイのホテル・トパスに着く。黒田理事長は休む間もなく、パナガラ・ウパティワサ師と連絡のため、ショーカンジ幼稚園におもむく。

キャンデイの町は標高三百メートル、なだらかな山々に囲まれた狭い盆地にある。前述のように北に栄えたシンハラ王朝が、インドからの侵入者に追われて南下し、最後に辿り着いたのがこの地で、人口わずか八万のこじんまりした町である。ここに有名な仏歯寺がある。

四世紀のはじめ、インドから運ばれた釈尊の左の犬歯が王権の象徴として代々継承され、四百年前の寺にもたらされ、仏歯寺と呼ばれて今日に至っている。いよいよ明日仏歯寺参拝である。

第四日目。仏跡巡拝の最後、いよいよ仏歯寺

参拝である。

パラガラ・ウパティツサ師の連絡により、再度打合せのためショーカンジ幼稚園に赴く。「正観寺」と書くのだろうか、四国の真言宗のお寺の寄進によって建てられた三階建の幼稚園である。この日は金曜日で、この週に生まれた園児のお誕生会が開かれていた。お坊さんが二人来園し、読経、法話をし、終って園児たちが大きな声で長々と唱えごとをしていた。何だろうと、思って訊ねると、五戒（不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不酤酒戒）を唱えているのだとのこと。子供向けにどのように訳しているのか、残念ながら聞き漏らしたが、無宗教教育の日本とくらべて、さすが仏教国という感を深くした。

さて、パナガウ・ウパティツサ師は私たちの仏歯寺参拝の段取りをととのえ、案内してくれた。賑々しく鐘や太鼓の打ち鳴らされている堂



幼稚園児たち

内に、人々は仏歯供養のため生の花々を捧げて合掌する。しかし仏歯を見ることはできない。

仏歯は、寶石を散りばめた金製の豪華なダゴバの奥深く納められている。さいわい私たちは、そのダゴバの真前に花を供えて合掌する機会が与えられた。

「これは永平寺様の御寄進によるものです」という説明を耳にしたときは、ああ、お参りできてよかった」としみじみ感じ入った。

ついで仏歯寺貫首パリパーネ・チャンダーナ・ンダ大僧正に面接。黒田理事長は以前国際会議で同席したことがあるとのことで、大僧正も「顔に見覚えがある」と懐しそうに話しておられた。二十七日からの仏跡参拝は以上をもって終了した。

### 大統領と堅い握手

飛行機の中で黒田理事長から手交された善光

寺海外留学僧派遣育英会の資料に眼を通したパナガラ・ウパティッサ師はたいへん感動し、「せっかく来られたのだから」と、時間の許す限り、この国の要人に会う機会を設けてくれた。

まず、キャンディ地区の州、セントラル・プロビンスの知事公舎を訪れ、知事のP・C・インブラーナ氏に面接の機会をつくってくれた。

J・R・ジャヤワルデネ前大統領が、一九五一年九月、対日講和会議にお国の代表として出席され、「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と、ソ連などが主張した日本分割案に強力に反対し、さらに対日賠償請求権を放棄されたことに対し、私たち日本人は心から感謝しております。昨年、講和条約締結四十周年を記念し、現在の自由国家・日本の大恩人というべきジャヤワルデネ前大統領を顕彰して、鎌倉大仏の境内に記念碑を建てたのも日本国民の感謝の気持ちのあらわれの一部

であります。

と、黒田理事長が述べると、州知事は、「いや、私たちがこそ日本に感謝しております。

前大統領、講和会議に出席したときは大蔵大臣でしたが、あの発言は時の大統領が指示したもので、国民全体の気持をあらわしたものでした。あの発言がお国との親善友好を深めるよすがとなったことを聞いて、たいへんうれしく思います。」

と述べられ、約三十分ほどなごやいだ雰囲気のもとに過ぎ、記念写真に納まって別れた。

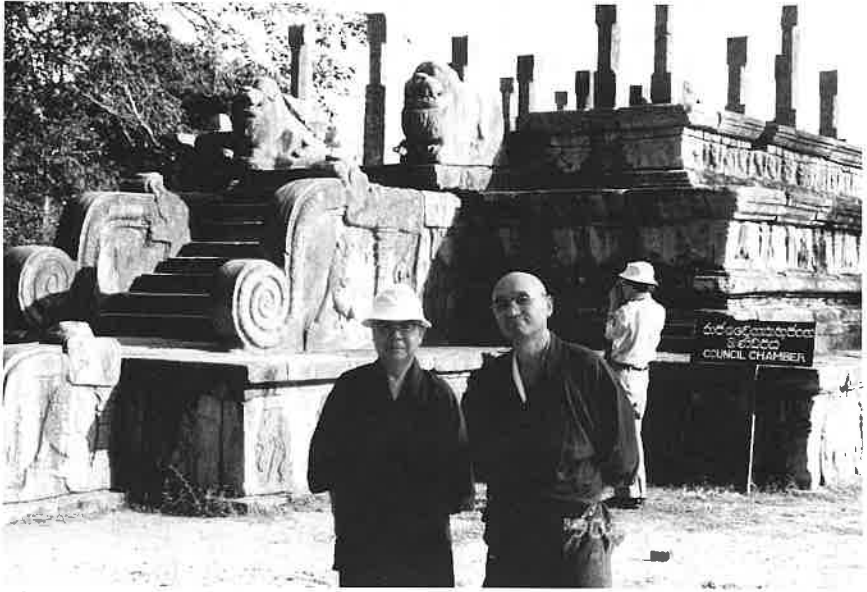
これでキャンデイ地区での用も済んだのでロンボに戻った。翌日、パナガラ・ウパティッサ師から、エネルギー省大臣が来園されるからぜひ来園してほしいとの電話連絡が入ったので吉田幼稚園に向いた。

この幼稚園は、東京在住の吉田医師ご夫妻の寄進によるもので、パナガラ・ウパティッサ師

は園長先生である。園長室を訪ねると、エネルギー省大臣サラット・チャンドラ・ラージャカルナ氏はすでに来られ、私たちを待つておつてくださった。国が小さいからというのではなく、日本の大臣の物々しさとはたいへんな違いで、お互い親しい隣人といった風で、肩書抜きで話し合えるのは実に素晴らしい。

この大臣とは、建築家伊藤喜三郎先生との間に共通の話題もあり、スリランカの国策遂行上の問題点についていろいろ意見交換がおこなわれ、大臣も満足して帰られた。

大臣との会見終つてパナガラ・ウパティッサ師は、私たちを大菩提会会長のところ案内してくれた。大菩提会会長ヒデイガレー・パナティッサ大僧正はスリランカ仏教界の大御所で、黒田理事長は、スリランカの僧さんを留学僧に採用したこの機会に育英会の顧問に推戴したい旨を述べると、すでに育英会の内容を承知して



ポロンナルワにて

いた様子で、快く承諾してくだされ、「明日私の八十一歳の誕生祝いに大統領が来られるから紹介しよう」と約してくださった。

十一月一日、午後九時過ぎ大菩提会会堂に出向き、ヘデイガレー・パナティッサ大僧正の応接室に通されると、緋の道中衣をまとった岩井清雅新大乘宗座主大僧正阿闍梨とその随員がおられた。同じ日本僧として親しく話し合っていると、次々に来室される人々の中に、パキスタン大使ラリス・S・マイトリーパーラ氏がおられ、伊藤先生と名刺交換をして、「お顔存じてます」という。伊藤先生はかつてパキスタンの病院を設計され、長く滞在されて大統領とも親しく、大統領室に写真が掲げられてあるとのことであった。

大統領は十時に来堂され、まず本堂でご本尊に献花、献灯して祈りを捧げてのち応接室に歩を進められた。報道陣がつかかけ押しかけ、く

ぐり抜けるのに容易でなかったが、ようやく大統領の前に出ることができて、黒田理事長が育英会の資料を手渡し、挨拶を述べると、エクスサランサー・R・プレーマダサ大統領は大きく頷き、資料を左手に持って高く掲げて一同に示し、何やら言っておられたが、周囲が騒々しく聞きとれなかった。恐らく賞揚か激励の言葉を述べられたのであろう、右手で黒田理事長と堅い握手をかわされた。

残念ながら、報道陣のカメラの放列に阻まれ、その劇的瞬間をカメラに納めることはできなかった。しかしその夜帰国の途につき、空港のラウンジで、九時四十分頃、テレビを見ていたら、ニュース放送の時刻となり、その一瞬がはつきり映し出されていた。

## むすび

このたびのスリランカ訪問はまことに有意義

だったと思う。仏跡を巡拝できたこと、そして一部の人に対してはあったが「善光寺海外留学僧派遣育英会ここに在り」ということを深く印象付けたこと、さらにまた育英会の運営が国際親善のため有効適切なものであることを感取することができたからである。

スリランカは貧しい国である。だからこそ「正観寺幼稚園」とか「吉田幼稚園」といった風に日本名のついた幼稚園がある。その他にもいくつかの施設のあることを耳にした。これらはいずれも一個人、一カ寺の寄進によるものである。これは素晴らしいことだと思ふ。豊かな国民の一人として国際親善に可能な力を注ぐことは奥床しいことであり、富める者の当然のつとめではなからうか。幼稚園をつくるのと日本ではたいそうの金額を必要とするのだが、この国では予想以上の低額出費でことが運ぶのであるから、心ある人の奉仕を望んで止ま

ない。

折も折、帰途空港ラウンジで、教育文化交流推進委員会の小西代表と同席する機会を得た。

この会の会員は、教育里親として、特定国の特定里子を持つシステムである。たとえばスリランカの子供を里子とするのである。それは、「私を見守る日本のこの人がいる」という安心感を彼の国の子供に与えることであり、日本にいる私たちにとっては、スリランカに自分を慕ってくれる子供がいるということになり、国境をこえた素晴らしい人間関係を生み出すものであり、会員は年間三万六千円を分担すればいいというものである。わずか四万円弱の金で国際親善に貢献できるとなればこれは有難いことである。関心のある方は左記に連絡されたい。

〒181 三鷹市中原2-16-9

電話 ○四二二一四九一三八〇八

教育文化交流推進委員会

さて、善光寺海外留学僧派遣育英会は、善光寺総檀徒の力の結集によって運営されている善光寺独自の可能な範囲においての国際親善友好推進事業であり、時宜に適したものであることを痛感し、誇りを持った次第である。

